HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学附属図書館報「楡蔭」109号
Issue Date	2001-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66381
Type	journal
File Information	yuin109.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ISSN 0917-3684

Hokkaido University Library Bulletin No.109 Mar. 2001

掬薗

Yuin 北海道大学附属図書館報

目　次

創基125周年を迎えた北大附属図書館
　附属図書館長　原　　暉之……1
資料紹介
・「北海道帝國大學平面圖」ほか
　工学研究科助手　池上　重康……6
お知らせ
・北海道大学学位論文(新制)目録データベースを公開 …9
・「情報探索入門」の授業を開始 ……10
・iモード版利用案内を開始 ……10
・シラバス掲載参考書とOPACのリンク実現 …11
・工学部図書室の夜間開館について ……11
北海道大学附属図書館講演会が開催されました …12
研究レポート
・「図書に関する異種情報資源の
　統合的利用方式に関する一検討」
　情報システム課　杉田　茂樹……13
教官著作寄贈図書（12.12.1～13.2.28）……15
会議（12.12.1～13.2.28）……16

創基125周年を迎えた北大附属図書館

原　暉之（附属図書館長）

北大125年の歴史とともに

知の創出，知の伝播と並んで，知の集積は大学の基本機能の一つである。そして大学で知の集積機能を中心的に担っている組織が図書館である。当然，大学はそのはじめから図書館と不可分の関係にあった。

北大の前身，札幌農学校が1876年8月に開校式を挙行したとき，その講堂には蔵書数6,149冊の「書籍室」が置かれていた。独立の建物としては同年12月に書籍庫が新築された。これが北大附属図書館の起源とされる。その後，閲覧室が増築され，書籍館と呼ばれた。まだ，図書館という用語が定着していなかった時代であった。1891年から97年まで新渡戸稲造が書籍館主任（監守）をつとめた。北大附属図書館の初代館長である。1907年，農学校の大学昇格にともなって東北帝国大学農科大学図書館となり，18年北海道帝国大学図書館を経て，47年現在の名称となった。

図書館（ビブリオテク）の古典的な姿は文字どおり本（ビブリオ）の置き場（テク）なのだから，図書館の歴史は，まずもって建物と資料の歴史である。札幌農学校が北1～2条から現在のキャンパスに移転したのは1903年で，その前年北8条に竣工した白亜の美しい建物が2代目の図書館となった（この建物は現存し，近年登録有形文化財の指定をうけたことは記憶に新しい）。この建物は増築もされたが，農学校の大学昇格とそれにつづく総合大学化のなかで，戦前期すでに利用環境が

悪化していた。戦後に文系学部が発足するなど，学部・学科の拡充と学生数の急増にともなって，いっそうの狭隘化と機能不全が目立つようになる。その間，1937年に図書館の新築計画が大学本部に提出されたが，実現にいたらず（これについては後述），新築までに60年余の長い歳月が流れた。

北大の創基80周年から90周年にかけての10年間（1956～66年）は校舎の新築・改築があいついだ時期に当たる。そのなかで，図書館の新営構想がようやく実現し，65年現在地に3代目の図書館が竣工した。現在の施設はこの本館（85年増築）と69年に新築した北分館（旧教養分館，77年増築，95年改称）からなる。

北大の歴史とともに歩んできた附属図書館は膨大な学術資料を集積してきた。あとでふれるが創基50周年（1926年）の時点で図書館の蔵書は14万冊に過ぎず，創基90周年（1966年）の時点でも図書館に46.6万冊，全学106万冊であった。現在の蔵書は，本館120万冊，北分館26万冊，これを含めて全学の蔵書は334万冊を数える(2000年3月末現在)。

主要なコレクションとしては，札幌農学校旧蔵書からなる「札幌農学校文庫」，北海道をはじめ，樺太，千島列島を含む北ユーラシア・北太平洋地域の関係資料からなる「北方資料」，内村鑑三文庫・新渡戸稲造文庫など本学草創期の卒業生のものを主とする個人コレクション12件，文部省から予算配当をうけた大型コレクション22件などがあり，いずれもその資料的価値の高さが広く学内外に知られている。

蔵書構築の歴史は，それ自体大学の進化の歴史の一部として語ることも可能であろう。たとえば本館の所蔵する「北方資料」は，1937年に全学的な研究施設として設置された「北方文化研究室」の収集資料がその基礎をなし，同研究室が66年「文学部附属北方文化研究施設」に改組されたさいにその資料を引き継ぎ，札幌農学校以来蓄積してきた資料を合体して67年「北方資料室」を開設した。またそれ以後も，北海道史研究の第一人者，高倉新一郎の旧蔵書や，スラブ研究センターから管理替えされた日露関係史を中心とするジョージ・レンセン文庫などを加えて，現在「北方資料」と総称される膨大かつ貴重な一大コレクションを形成しているのである。

図書館は大学教育の心臓である

しかし，附属図書館125年の歴史はたんに施設と蔵書の量的・質的拡充にとどまらない。一般に図書館は建物と資料と人の3つによって構成されるというが，過去の遺産のなかでも人的ファクターは大きいのである。附属図書館は先人の図書館理念，ライブラリアンシップの質の高さや，情報スキルといったものも継承してきた。

過去から受け継いでいる先人の図書館理念について，ここでは「図書館は大学教育の心臓である」というメッセージを第5代・高岡熊雄館長が遺した言葉として紹介しておきたい。高岡の館長在任は1905年から33年まで実に28年間にわたったが，この言葉は26年5月14日の『北海タイムス』に掲載されている。折しも北大の創基50周年記念式典が挙行され，クラーク博士の胸像が除幕されたその日のことである。

「図書館は大学教育の心臓である」，もし大学における研究の成績如何を知ろうとするなら，まず図書館の施設如何を見れば難なく想像できる。されば欧米の大学では何をおいても研究者の人事と図書館の設備とに最大の注意を払っているのである。我が北海道帝国大学図書館の蔵書数は約14万冊，これは20年前，わずか1万数千冊の蔵書しかなかったことを思えば大いなる発展をなしたともいえるが，ハーバードやオクスフォードなど欧米有数の大学とは到底比較すべくもない。農・医・工の3学部からなる総合大学としては蔵書数の少なきを嘆かざるをえない。図書の貧弱はひとり北大だけではないが，これは我が国家および社会が大学教育の真の使命を未だ充分に諒解しないからであると非難する者があっても恐らくは弁明の言葉がなかろう，高岡館長はこのように述べて，図書館充実に対する国と社会の協力，後援を訴え

たのであった。

高岡館長はもう一つ興味深いことを述べている。北大図書館の分類は米国式の「デシマルシステム」によっているが，本邦にはこれを採用している館はあまりない，というのである。ちなみに，北大がデューイの十進分類法を採用したのは1900年に遡る。合理的な図書の分類法を先駆的に採用して以来，全学のスタンダードとしての1世紀の伝統は誇るに足るものといえよう。

「図書館は大学教育の心臓である」というメッセージは，戦後の節目に際しても再確認された。新館の竣工がなった時点で館長に就任した第14代・今村成和館長は，北大附属図書館の近代化を図るにはその組織と機能の分析を避けて通ることはできないとして，1966年「北海道大学附属図書館報告書」を起稿し，組織における中央館と部局図書室の関係についても，機能における学習図書館機能，研究図書館機能，総合図書館機能，保存図書館機能という4側面からの現状分析についても，重要な指針を与えたが，その「はしがき」のなかで，今日の大学図書館はもはや単なる「書物の貯蔵庫」であってはならず，「大学の心臓であり学術情報組織の中枢」でなければならない，と述べている点が注意を引くのである。

北大附属図書館が，その創基50周年と90周年の節目に「大学教育の心臓」とか「大学の心臓」という言葉によってその基本機能を表現したことは今日改めて想起されてよい。

改革と変化のなかで

はからずも私は1997年4月第24代館長に指名された。以来2001年3月にかけての4年間は，北大の創基120周年を機にあわただしく大学改革が進行した時期に当たる。同時に，図書館をめぐる環境にも急激な変化が押し寄せた時期に当たっていた。

1996年10月に挙行された北大の創基120周年記念式典式辞のなかで，丹保憲仁総長は，現在北大は大きな改革を進めているが，その中心をなす変革の構造は3つに要約できるとして，第1に，組織の重心を大学院に移し，研究者・大学院生が創造的な研究を進める発信型の研究大学を創り，世界と競い地域社会の核となること，第2に，基礎を重視した学部4年一貫教育をシステマティックにつくり上げること，第3に，大学と社会の連携，地域の人々や産業への貢献が大切であることを強調していた。

一方，同年7月には学術審議会建議「大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化について」の形で大学図書館の電子化を方向づける指針が打ち出されていた。

振り返れば，過去4年間は附属図書館として「学部一貫教育」，「大学院重点化」，「社会に開かれた大学づくり」などを柱とする北大の大学改革にどのように参画するか，その一方でインターネットの急速な普及にみられる環境変化のなかで要請される図書館の電子化をどのように実現するか，という重なり合う諸課題の解決を迫られつづけた4年間であった。

着任早々に考えたのは，図書館を活性化しなくては，ということである（拙稿「図書館の活性化のために」『楡蔭』No.98)。不勉強で，「図書館は大学教育の心臓である」という言葉を当時は知らなかった。しかし，ある種の沈滞ムードが漂っているようにみえた図書館を活性化しなければ，教育現場とのあいだの血流が滞り，このままでは図書館の地盤沈下も避けられないという危機感があったのは事実である。最優先の処理を要したのは，北分館の存続と機能充実であった（拙稿「北分館の機能充実のために」『楡蔭』No.99，吉野悦郎［北分館長］「北分館の将来像」同誌同号)。幸い学内外の支援をえて，まず北分館を情報環境図書館へグレードアップする道が開かれ（吉野悦郎「北分館が情報環境図書館へとリニューアル」『楡蔭』No.103)，これを追って本館についても，創基125周年記念事業の一環としての歴史的資料の整備に絡めた施設整備が認められた（拙稿「館蔵歴史的資料の整備に寄せて」『楡蔭』No.104)。このほか，関係者の努力を結集して1999年3月に図書館情報システムを更新したこ

とと，2000年度から本館及び北分館における学習図書館機能を充実させるための財源として新規に学生用図書費が措置されたことが図書館の活性化に大きな弾みとなった。

「電子図書館化」については，北大附属図書館の自己点検からはじめることにした（拙稿「電子図書館的機能の強化のために」『HINES World』No.42)。前途遼遠であるが，目録所在情報データベース構築のための遡及入力事業では，全学の総蔵書数に対するオンライン検索可能冊数の比率は2001年3月時点で75％に達する見込みで，これは全国の大規模大学のなかではトップクラスの実績として評価されているし，貴重資料・特殊コレクションの電子化については1993年から科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の採択により開始されたマルチメディア対応「北方資料」データベース事業は第1期～第3期計画が終了し，全国的に類例のない貴重な電子情報を附属図書館ホームページを通じて広く学内外に公開している。当面する大きな課題の一つは，急速な普及をみせている電子ジャーナル（学術審議会の96年建議では片言隻句も言及されていなかった）の導入である。その導入は全学の図書館サービスの方向性としては確実であるが，その価格体系，サービス形態等の将来像はなお不透明であり，全学的な予算ポリシーやネットワーク上の問題等，図書館業務の枠をこえた対処が要求されるかもしれない。

読書は奨励されねばならない

大学改革と環境変化のなかで，附属図書館は教育・研究プログラムと図書館サービスとのいっそう緊密な連携を図ることを今日とくに重視している。次に挙げるのはその重点項目である。

(1) シラバス掲載図書の網羅的収集と提供

各授業科目のシラバスに担当教官が推薦図書として記載したものを網羅的に購入し，本館・北分館に配架して学生の利用に供する（2000年度から実施中)。

(2) シラバス・データベースと目録所在データベースとの連携強化

シラバス・データベースに記載された推薦図書から図書館の目録所在データベースを参照し，所蔵の有無，配架場所などを確認できるようにする。また，未購入の場合は担当教官からネットワークを介して即座に購入申し込みができるようにする(2001年度開講に向けて実施中)。

(3) 博士学位論文の目録データベース化

新制大学発足以来の北大の博士学位論文（約1万1千件）をデータベース化し，学内LAN，インターネットを介して随時検索できるよう学内外に発信する（2001年3月から実施中)。

(4) 情報リテラシー教育への支援

全学共通教育の「一般教育演習」科目のなかで，担当教官の希望により「情報探索入門」の時間を設け，図書館職員が担当教官に協力して初歩的な文献検索法の実習指導を行う（2001年度1学期から実施予定)。

(5) 学術雑誌の重複購入の調整と電子ジャーナルの導入による全学共同利用の推進

ネットワークを介して学内のどこからでも24時間利用できる電子ジャーナルを導入することにより，重複購入を調整して経費を節減するだけでなく，学術情報をより迅速かつ効率的に入手・提供するシステムをつくる（図書館委員会「資料整備に関する懇話会」で検討中)。

これらのうち，とくに(1)と(2)は2000年度新規に学生用図書費が措置されたことと，教務委員会のイニシアティブにより2001年度から学部専門教育科目を含む全学的なシラバスの電子的公開が開始されることをうけて館内に生まれた新たなアイデアの実現である。

シラバス掲載推薦図書の網羅的購入・配架に関連して，最後に「読書は奨励されねばならない」というメッセージを記して結びとしたい。

読書の奨めなど今さら，との向きもあろう。しかし北大がこのことで苦い経験をしているのも事実なのである。図書館関係者もほとんど知らないこの事実とは，以下の通りである。

1937年3月9日の『北海タイムス』に，「北大に生まれ出る豪華な図書館／読書より研究へ……

を目標に」という見出しが躍っている。この記事によると，1903年以来使われてきた図書館にかわって新図書館が「今度百万円の予算で新設される事となり」本部に設計図が提出された。驚くべきはつぎの一節だ。

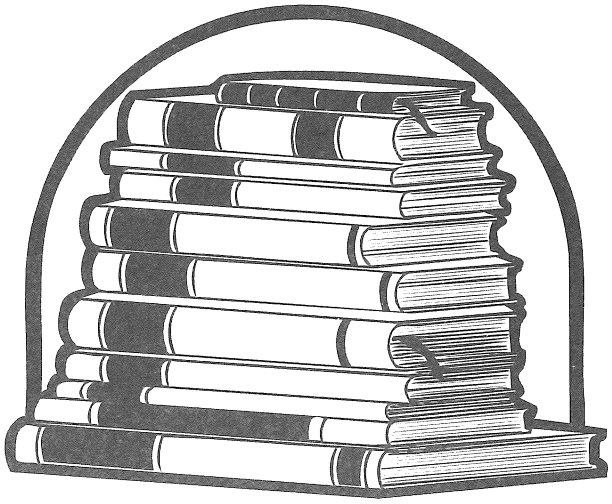
「新図書館の特徴はたゞ読書するといふ過去のやうなものではなく図書館は即ち研究室なりとの建前から1階，2階，3階に各教授の為に28の研究室を設けた事である」

「読書」と「研究」が対置され，「ただ読書する」というのはもはや時代遅れであって，これからは「研究」が図書館の主要機能だというのである。すでにふれたように，戦前37年の図書館新築計画は日の目を見ずに終わった。しかし，この計画の基本理念はその後の反省に立って捨て去られたとはいえないように思われる。ここでは検討を省略するが，当時の計画は戦中・戦後を生き残って現在の本館を建てる際の設計に下敷きとされた形跡すらある。それはとにかくとして，私たちは「読書より研究」なる言説を，現代とは無縁の，特殊な時代の産物として嗤えるだろうか，という問題は残る。

2001年度からのシラバス電子化によって判明したことの一つに，各授業科目の推薦図書欄に著者・書名等のデータを入力した担当教官の数が予想を大きく下回ったという事実がある。もとより，入力の煩瑣の解消など，図書館側にも改善点があろう。しかし，担当教官の工夫次第によっては，従来以上に教室での教育と図書館を利用する自学自習がより緊密な形で結びつけられうるのではないか，と思われてならない。少なくとも一定の財源は確保されており，図書館による教育支援システムの枠組みはすでに出来上がっているのである。

館長を退任するにあたり，いささかの感慨をこめて，北大附属図書館の過去と現在の一端を記すとともに，125年の歴史の遺産から何を受け継ぐことができるかという問題を提起して，これからの図書館を担う人びとに伝えておきたいと思う。

（スラブ研究センター教授）



資料紹介

「北海道帝國大學平面圖」ほか

工学研究科助手　池　上　重　康

今年2001年が北海道大学創基125周年にあたるというのは，皆さん周知のことと思う。

北大の古くからの建築図面や施設配置図などを，数年前より事務局に足しげく通い，漁ってきたこともあり，昨年，125年史編集室員の任を受け，主に「写真集」の編集にたずさわることになった。25年前に発行された『写真集北大百年1876－1976』とは雰囲気の違ったものにしようと，1章を「札幌キャンパスの125年」，2章ではそれ以外の附属施設などを扱い，3章を「トピックで綴る北大の125年」として構成することに，おおよそ意見がまとまっている。当初は最近25年間の写真を集めながら，先の写真集で用いなかった旧知の写真や図面などで再構成する程度のものを考えていたが，125年も歴史があると所蔵史料の懐も深く，意外にも未知の史料に少なからず遭遇することになった。

今回紹介する3枚の配置図は，この史料発掘の作業の中で発見されたもので，本学の歴史を語るにおいて重要な史料といえる。概要は以下の通りである。

	図面名称	縮尺	図面の大きさ(縦×横mm)	額の大きさ(縦×横mm)	作成年
①	舊札幌農學校平面圖	1/500	475×475	595×595	明治13年調整原図模写
②	北海道帝國大學博物館及農科大學植物園平面圖	1/1000	482×475	595×595	大正7年頃
③	北海道帝國大學平面圖	1/1000	1101×1828	同左	大正7年頃

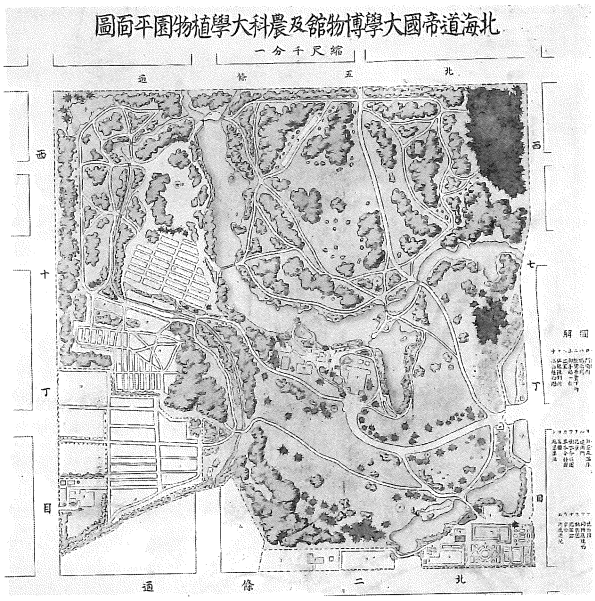
昨年春に附属図書館北方資料室で見つけた時は，しばらく放置されたことを物語るかの如く破れが目立ち，さらには長年にわたり吸ってきた埃で彩色もはっきりせぬほど黒ずんだ状況であった。幸い総長裁量経費の研究助成を受け，その一部でこれら配置図の洗浄および額装をすることができた。80余年の時を越え，総合大学に昇格した時の感動と意気込みが，鮮やかな色彩で私たちの眼前に蘇ったのである。

①の図面は北1条キャンパス（現在時計台のあるあたり）の様子を示しており，廣井勇が1880年4月に描いた“Forth Annual Report of the Sapporo Agricultural College, Japan for 1879－1880”巻頭に掲載されている“Plan of the Sapporo Agricultural College Garden & Arboretum”の原図を模写したものと推察される。北3条西1丁目のブロックが苗圃および植物園であった状況を知ることのできる貴重な史料である。シンメトリカルな幾何学的配置構成や1876（明治9）年にL.ベーマー設計により建築された温室（1886年10月に現附属植物園内に移築）の位置がわかる。いつ模写されたかは不明だが，おそらく後述する2枚と同じ時期に旧キャンパスを偲ぶ意味も込めて描かれたのであろう。

②の図面は附属植物園のもので，図面名称の「北海道帝国大学農科大学」という記述から1918（大正7）年度内に描かれたことがわかる（北海道帝国大学農科大学という組織は1918年4月1日設置，翌1919年3月31日廃止）。現在と比較しても，管理棟の有無や温室の規模の違い程度で，遊歩道や幽庭湖など，ほとんど変化がないといえる。



①舊札幌農學校平面圖



②北海道帝國大學博物館及
農科大學植物園平面圖

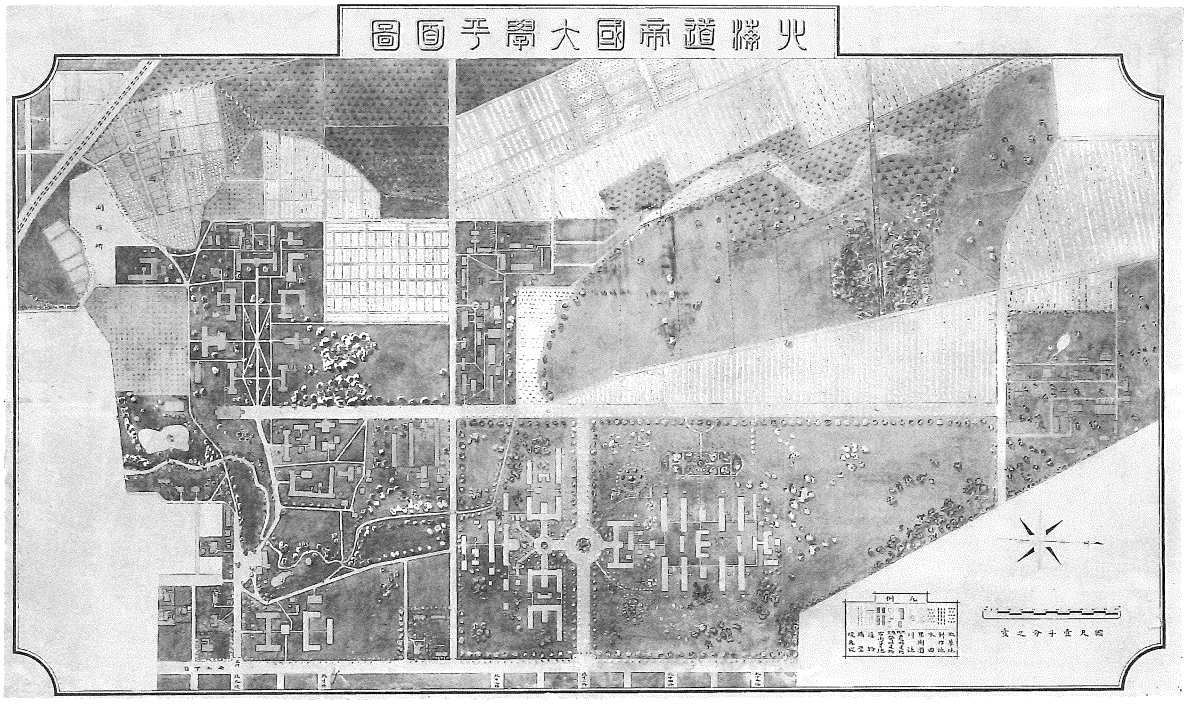
③は帝国大学昇格を機に作成されたと考えられるものである。現在のメインストリートに相当する道路が形成されているが，工学部（いわゆる白亜館）は未だ姿を見せず，「医科大学」と書かれた医学部の施設群は建設予定，さらには北13条通りの途中にロータリーを設けている。現在のキャンパスの骨格が見え始めているとはいえ，1970年以前の木造校舎がふんだんにあった時代のキャンパスをご記憶の方々は，何となく雰囲気が違うと思われるに違いない。その理由は，北13条通り北側一帯の附属病院（正確には当時は附属医院）が，その後まったく異なった姿で建築されたことにある。では，この配置図は何を描いたものなのか。

ここに描かれる医学部の配置は，文部省が東京帝大医学部に準じて設計したものである。実は，これまで大正7年4月1日「北海タイムス」掲載の不鮮明な図でしか，この文部省案の様子を知ることができなかった。設計変更の紆余曲折をここで簡単に紹介したい。

基礎科（北13条通り南側）の諸施設がおおよそ姿を現わしたころ，後に初代病院長となる有馬英二がこの設計案に「昔私らが勤務していた，明治41年頃の東大病室と同型のもの」と難色を示し，更に「初めて之を見た時の私の驚きはどんなでしたらう。…之は全然設計変更をして最新式の大病室を建て今後数十年吾が北海の天地が大いに開け人口が数百万増加するとも障碍のないような永久的のものを造らなければならぬと決心」し，「鉄筋コンクリート造の3階建の高層建築を推奨」した。が，予算との折が合わず不採用。それでも当初の意気込み通り「病院の模範を全日本に示してやろう」と，ドイツの最新式の病院建築に範をとった各科病棟独立の並行配置を提案し，それが当時の営繕課長に受け入れられた。病棟の設計には各臨床科教授が進んで参画，提案をしたという。

また，医学部を2つに分ける北13条通りは，当時の病理学教授今裕（後の第4代総長）が提案したものという。今が「ダブルアレ」と表現する歩車分離の道路は当時の北海道では珍しく，今は「何しろ唯の10年前まで道幅は馬鹿に広いが人道車道の区別もなく道は一本に限るものと思ひこんでいる札幌人士の眼からは気狂ひの沙汰だと思はれたのも無理はない」と懐述する。秋には色彩のトレモロで人々を魅了するイチョウ並木は，当初は桜や紅葉が植えられていた。秋だけでなく春にも人の目を楽しませてくれた道路だった。北13条通りの歩車分離道路は，植栽は変わったものの現在でもそのままの形式で残っている。

文部省案には茫漠たるロータリーが見えるだけである。



③北海道帝國大學平面圖

1枚の古図から，忘れられつつある大学の歴史の一ページが繙かれる。先人たちの努力と情熱は，現代の私たちの心に熱い何かを語りかけてくれる。

果たして21世紀の北海道大学，未来を見据えた高邁なる野心と理想をもって，どのような形の全国に範たるキャンパス計画を提示するであろうか。

お知らせ

附属図書館本館

北海道大学学位論文(新制)目録データベースを公開！

かねてより北大の学内外から要望のありました，北大の「学位論文」データベースを，３月１日より附属図書館のホームページ上で公開しました。昨年度始めより準備を始め，９月７日の学術情報委員会で図書館のホームページにおいて公開との承認を得たうえで，この度の公開へと漕ぎ着けたものです。

基礎データは国立情報学研究所の個別版データを利用し北大で加工・補充作業を行ったものです。

収録データは，新制の学位論文，1958年（昭和33年）～2000．３（平成11年度）授与分の合計10,886論文で，順次更新していく予定です。論文本体は授与学部の図書室所蔵となっておりますが，連絡先等詳細は学位論文ホームページの「利用案内」をご覧ください。

旧制の学位論文4,564件は附属図書館で所蔵しており，３階カウンターには「北海道大学学位論文目録〈旧制〉」を備えておりますので，ご利用ください。

・以下の検索画面で，データの各項目から検索できますので，ご利用ください。

URL　http://libserve.lib.hokudai.ac.jp/db/



一般教育演習で「情報探索入門」の授業を開始

インターネットの急速な普及等,高度情報化社会を迎え,大学として学生が入学した早い段階から学術文献の探索方法を修得する,そのための情報リテラシー(利活用)を身につけさせる取り組みが求められています。

これまで,附属図書館ではオリエンテーションやガイダンス,またライブラリーセミナーとして,国内・海外雑誌論文の探し方や,インターネット情報の探し方等を実施してきましたが,平成13年度からは初年次の学生を対象に,一般教育演習を担当する教官が希望する場合には,正規のカリキュラム(半期15回)のうちの1回(90分)を,図書館職員とTAが実習補助者となって「情報探索入門」の授業を実施することになりました。

講義内容としては,以下を予定しています。

1. 学術文献とは何か
   - 文献の諸形態(図書,雑誌,新聞等),媒体の変化(冊子体,CD-ROM等の電子媒体),及び一次資料と二次資料について
2. 文献を探す　1:図書館の蔵書を探す
   - 北大のオンライン目録(OPAC)とNACSIS-Webcat(国立情報学研究所提供)の演習
3. 文献を探す　2:雑誌論文を探す
   - 北大附属図書館が購入し,HINES経由で提供している各種データベースの紹介と,その一つである雑誌記事索引のデモンストレーション
   - 参考文献・引用文献の見方について

これまでに前期26件,後期13件の申し込みがあり,情報教育館,北分館を会場に,4月下旬からスタートする予定で,現在準備をすすめています。

iモード版利用案内を開始

最近のiモード携帯端末の普及はめざましいものがあります。

図書館では,これらiモード利用者向けに,新たにiモード版利用案内サービスを開始しました。パソコンがなくとも,お手元のiモード端末から利用案内や開館情報を見たり,北大の蔵書検索ができるようになったということで,非常に便利になりました。

iモードの場合,表示可能な文字数が限られるなど,提供できる情報内容は制限されますが,今後も利用者の皆さんに必要な情報を簡潔な内容で提供していく予定です。ぜひご利用ください。

接続先アドレス,およびサービス内容は以下の通りです。

- iモード版利用案内アドレス　http://www.lib.hokudai.ac.jp/i/index.htm
- サービス内容
  1. お知らせ
  2. 開館情報
  3. 北大蔵書検索

シラバス掲載参考書とオンライン目録所蔵情報のリンク実現

研究業績データベース拡充計画の一環として，学術情報委員会のもとで平成12年度に作成された「2001年度シラバス」データベースに図書の所蔵情報がリンクされ，今までは参考書がどこにあるのか図書館の蔵書検索画面（OPAC）を開いて検索しなければなりませんでしたが，シラバスの参考書の項目に掲載されている図書の，学内の所蔵画面をシラバス上で見ることができるようになりました。

＊今回の取り組みには2つの目的があります。

1．シラバス掲載参考書の所蔵情報を提供

各教官が担当授業科目の参考書を入力する際，北大蔵書目録を検索して必要なコードの入力を行います。これによってシラバスデータベース利用者は，リンク表示された参考書名をクリックすると掲載図書の所蔵画面（通常の図書館蔵書検索［OPAC］の検索結果表示画面）が表示され，その所在情報が判るようになっています。

2．本館・北分館にシラバス掲載参考書を備え学生用図書の充実を図る

図書館では，シラバスに掲載された参考書について本館と北分館に備え，授業に直結した学生用参考書の充実に努めます。各教官が担当授業科目の参考書入力時に蔵書検索を行い，本館及び北分館で所蔵していない場合はその入力画面から購入申し込みが可能となっております。

大学院工学研究科・工学部図書室の夜間開館について

平成12年第2学期から試行的に夜間開館を行ってきましたが，利用者の皆様には大変好評でした。平成13年度からは下記のとおり夜間開館を本実施します。

1．開始月日：平成13年4月6日（金）から
2．延長時間：月曜日から金曜日までの17時から20時まで
　　但し，春季，夏季及び冬季の休業期間は17時まで
3．利用範囲：資料の閲覧，貸出・返却，複写（校費・私費），本学の蔵書検索，CD-ROMデータベース検索など
4．利用対象：本学の全構成員及び身分証明書持参の学外者

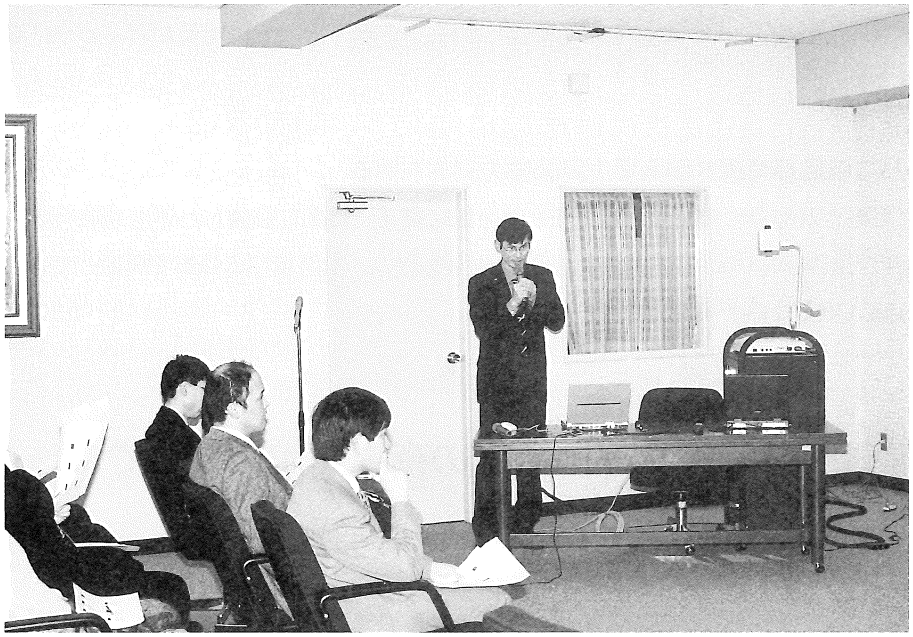
＊貸出には「学生証」又は「図書館利用証」が必要です。
＊学外者は閲覧（複写の一時持出し可）のみの利用になります。
＊夜間開館は中央図書室のみの実施です。専攻図書室・旧分室は17時で閉室しますので，ご注意下さい。

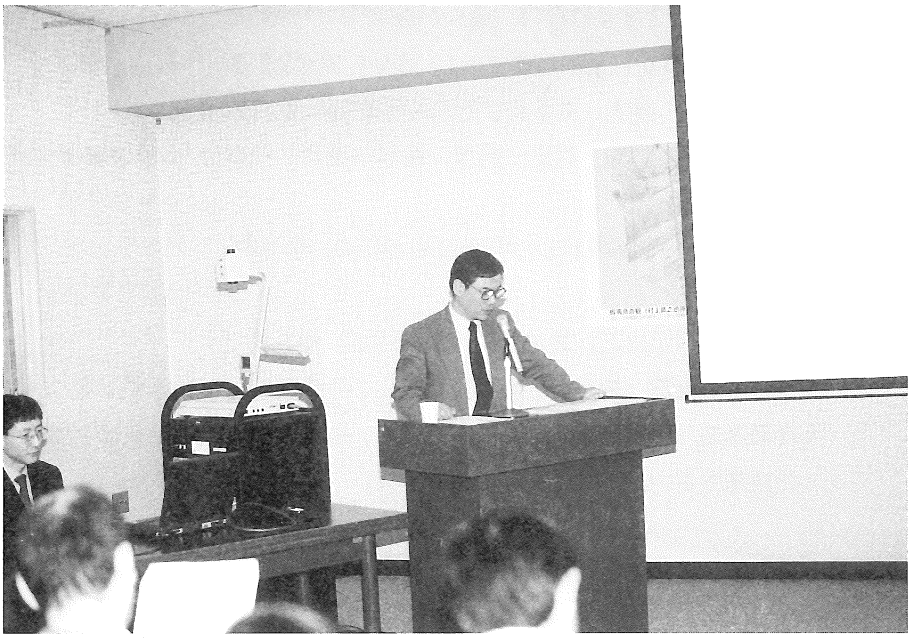
・利用の問合せ：図書閲覧掛（706-6160or内線6136，6160）

北海道大学附属図書館講演会が開催されました

平成13年1月23日（火）附属図書館会議室において，道内国立大学等の図書館職員を対象とした，北海道大学附属図書館講演会が開催されました。

千葉大学附属図書館情報管理課長平元健史氏による「電子ジャーナル・オープン・コンソーシアムの形成について：JIOC／NUを中心に」，岡山大学附属図書館情報サービス課電子情報係長北條充敏氏による「海外におけるコンソーシアムによる電子情報の動向について」及び当館情報システム課目録情報掛杉田茂樹氏による「図書に関する異種情報資源の統合的利用方式に関する一検討」の講演があり，道内の国立大学，高等専門学校及び本学図書館職員から約60名の参加がありました。





図書に関する異種情報資源の統合的利用方式に関する一検討

情報システム課目録情報掛　杉田茂樹

国立情報学研究所セミナーについて

平成12年度「国立情報学研究所セミナー」が，平成12年6月19日から12月15日までの約半年間にわたり実施されました。このセミナーは，従来「学術情報センターセミナー」として行われていたものです。平成12年度の参加者は東京工業大学附属図書館の五十嵐裕一さんと三重大学附属図書館の木下聡さん，それに私の3名でした。

国立情報学研究所セミナーにはとくに講義といったものがありません。受講生は同研究所の担当教官の指導をうけながら，各自が設定した主題について研究を行います。そして最後に「研究成果発表会」という場でそれぞれ研究してきた内容についての報告を行い，「研究レポート」を提出して修了となります。以前は，期間を通じて学術情報センター（現国立情報学研究所）に滞在する形態で実施されていましたが，今回から，国立情報学研究所と本務地を数週間おきに行き来しながら受講する形態になりました。本務地では通常の図書館業務の傍ら，電子メールで担当教官の先生から指導を受けつつ，研究を進めました。

東京工業大学の五十嵐さんは「図書館内での利用に適したPC」という題材をとりあげられました。

図書館館内で運用される利用者向けパーソナルコンピュータには，運転中のモーター音などの静粛さ，運用上の安定性，不慮の障害時等における復旧作業の簡便さなどが求められます。五十嵐さんは，内容の変更が不可能な外部記憶装置から起動し，主記憶のみを用いて稼働する，Linuxベースのシステムを提案しています。本学図書館でも，蔵書検索用端末や，インターネット利用のための「情報ターミナル」など，多くのパーソナルコンピュータが来館者向けに開放されています。これらは通常の市販製品であり，ハードディスクを装備していますので，モーター音が発生します。1台1台はさほどではないにせよ，数台～十数台を並べると，とくに閲覧室のような静粛な環境では，それが騒音として感じられることがあります。また，しばしばシステム内の状態変化によって正常な運転ができなくなり，復旧のためにサービスを停止せざるをえなくなることも少なくありません。こうした機器の選定や運用を考えるうえで，五十嵐さんの研究には教えられるところが多くありました。

三重大学の木下さんは「WWW型遠隔学習における教師と学習者の支援」という題目で，分散環境を想定した教育支援システムを試作されました。

衛星通信やネットワークを介したコンテンツ配信が普及し，また生涯学習という言葉がしばしば聞かれる昨今，通信教育を支える技術は，今後ますます必要とされてくるのではないかと感じられます。木下さんの提案したシステムでは，教科書データ作成から，運用時における学習者相互のコミュニケーション支援までがカバーされています。分散した環境下での学習というと，教師と学習者との1対1の関係がイメージされますが，このシステムでは，同一の関心，問題意識を共有する学習者の間にグループの形成を促すような構想が含まれており，とくに興味をひかれました。また，教科書データ作成機能の部分では，JavaScriptというプログラミング言語により，だれもが，各自の使いなれたWWWブラウザ上で，それとは意識することなくXML形式の構造化文書を作成できるとのことです。この手法は，たとえば事務文書のフォーマット統一化や，系統立った管理・利用といった方面にも応用が可能なのではないかと思いました。

私自身は「図書に関する異種情報資源の統合的利用方式に関する一検討」なる題目で，図書館のオンライン目録とインターネット上の書評コンテンツを統合的に利用するシステムを試作しました。以下に簡単にその概要を述べます。

個別研究の概略

図書に対する関心には『○○について書かれた本を読みたい』というタイプのものと『○○という本が読みたい』というタイプのものとがあります。今回のセミナーでは，後者，つまり，

- ある本を読もうかどうか迷っている。
- 買おうかどうか迷っている。
- 今読んだ本について他の人の感想を聞いてみたい。

というようなケースで役に立つよう，インターネット上の書評コンテンツおよび図書館の所蔵情報を一括提供するシステムを考えることにしました。

数年前までは，ネットワークを介して得ることのできる図書に関する情報というと，図書館のオンライン目録や，市販の文献情報データベースなどが主なものでした。しかし，近年ではインターネットとくにWWW利用の一般への普及にともない，ネット上には図書に関しても多種多様な情報資源が大量に発生して利用可能になってきています。出版社や流通業者は販売広告や紹介記事，書評などをWWWで提供していますし，また気に入った本をその場で発注できるサービスもあちこちで始まりました。一方，読者の側でも，読んだ本の感想をメインコンテンツとするサイトが多数活発に活動しています。図書の情報をオンラインで入手したい人にとっては好適な環境がしだいに整ってきつつある状況であると言ってよいでしょう。

さて，特定の図書についての情報を幅広く求めたい人にとって，こうしたインターネット上の情報資源に効率よくアクセスするにはどのような方法があるでしょうか。現状ではWWWのサーチエンジンの利用が考えられます。しかし，さまざまな関心を持った不特定多数の利用者の検索要求に対応すべく設計されたサーチエンジンからは，書評を探索する利用者にとって必ずしも最適な検索結果集合が得られるとは限りません。

難点のひとつは，利用者にとって検索に用いるキーワードの選定が難しいという点にあります。たとえば書名をキーワードに用いて検索を行うと，とくにその書名が一般的な語彙である場合など，当該図書について書かれた文書以外の大量の文書がヒットしてしまいます。また，逆に特定性が高いと考えられるISBN（国際図書標準番号）による検索では，ISBNが記述されていない文書が検索結果から洩れてしまいます。

もうひとつの難点は，仮に，適切な検索結果集合が得られたとしても，ユーザはそこで発見したWWWページをひとつひとつクリックしながら巡回しなければならないことです。さらに，ネットワーク上のコンテンツはデザインも構成もさまざまですので，文書中の本来読みたい箇所を見つけ出すのに苦労することも少なくありません。

図書館のオンライン目録には，書名や著者名をはじめとして，図書情報を探索するにあたって助けになりえそうなデータが含まれています。今回の研究では，上にあげた難点を解消することを目指し，図書館目録を援用したシステムを試作しました。

試作したシステムは，WWWブラウザをユーザインタフェイスとし，ISBNで図書情報の検索を行うものです。ISBNを投入すると，システムは自動的に図書館のオンライン目録にアクセスします。そして，そこから書名や著者名などの書誌情報を引き出し，次に，あらかじめ用意しておいたネット上の情報資源の索引に対し，問い合わせを行います。さらに，問い合わせの結果得られた集合に含まれるコンテンツを順次走査し，フィルタリング，ランキングののち，書評の内容を一覧表形式で検索結果として提示します。さらに目録検索システムからは所在情報も得られますので，利用者は関心対象の図書が図書館にあるかどうかを併せて知ることができます。

セミナー期間の前半を，ネット上の書評コンテンツの特性調査と仕様の検討にあて，期間後半で実装を行いました。仕上り具合については，検索スピードが実用レベルには程遠い点をはじめとして，フィルタリングの性能，ランキングの性能等，課題は山積みですが，ひと通りの動作を確認できました。使いどころとして，

所在情報と書評とを併せて提示するような目録検索システムの拡張といった用途も可能かと考えています。

おわりに

日常の図書館業務では，つい実用性や即効性ということを主眼にものを見てしまいがちで，それが半ば習慣になっていました。今回のセミナーでは，そんな自分の頭を研究ベースでの視点へと切り替えるのに，期間の大半を費してしまったような感覚です。それが，今回取り組んだ研究そのもの以上に，大きな刺激であり収穫でした。興味深い分野について，半年間にわたって，集中して考えにふける機会を持てたことに感謝いたします。

最後になりましたが，ご指導下さいました国立情報学研究所の宮澤彰先生，江口浩二先生，NACSIS-CATデータの使用に配慮をいただいた同開発・事業部コンテンツ課のみなさま，セミナー期間を通じお世話いただいた同国際・研究協力部成果普及課のみなさま，ならびに研修の機会を与えて下さった北海道大学附属図書館に深く感謝いたします。

国立情報学研究所セミナー
http://www.nii.ac.jp/hrd/HTML/Seminar/

研究レポート
http://www.nii.ac.jp/hrd/HTML/Seminar/h12/sugita.pdf

教官著作寄贈図書

2000.12.1-2001.2.28

[本　館]

(法学部)

中川　明編	イジメと子どもの人権	信山社	2000
鈴木賢ほか著	市場経済化の法社会学	有信堂	2001
高見勝利ほか著	注釈憲法　第1巻	有斐閣	2000

(理学部)

谷口和彌，嘉屋俊二	Na/K-ATPase and Related ATPases	Elsevier	2000

[分　館]

(言語文化部)

高井潔司編著	現代中国を知るための55章	明石書店	2000
高井潔司著	中国情報の読み方	蒼蒼社	1996
高井潔司著	甦る自由都市　上海	読売新聞社	1993
高井潔司ほか著	中国の時代	三田出版会	1995

ご恵贈誠にありがとうございました。今後とも図書館資料充実のため，皆様のご協力をお願いいたします。

会議（12. 12. 1～13. 2. 28）

【学　内】

◎図書館委員会

○第182回〈2月9日（金）〉

議　題

1　情報公開法の施行に伴う規程の改正について

2　分館委員会委員の選出方法について及び北海道大学附属図書館北分館規程に関する申合せの改正について

3　平成14年度歳出概算要求事項及び平成13年度営繕要求事項について

4　北海道大学図書目録データベース第4期遡及入力事業5年計画（案）について

5　平成13年度本館及び北分館の開館予定（案）について

6　本館改修にともなう各閲覧室の臨時閉室について

7　重複雑誌不用決定について

報告事項

1　北分館委員会（11月28日開催）について

2　資料整備に関する懇話会理系部会・医系部会合同会議（12月1日，1月17日開催）について

3　図書事務改善検討小委員会（2月7日）について

4　学位論文データベースの整備について

5　平成13年度一般教育演習における「情報探索入門」の実施について

6　平成13年度図書資料（大型コレクション）及び自然科学系図書資料収書計画調書について

◎資料整備に関する懇話会「理系部会・医系部会合同会議」

○第2回〈12月1日（金）〉

○第3回〈1月17日（水）〉

◎図書事務改善検討小委員会

○第3回〈2月7日（水）〉

【学　外】

◎平成12年度国立大学附属図書館事務部長会議〈1月25日（木）〉（徳島大学）

◎北海道地区国立大学附属図書館事務（部・課）長会議〈12月8日（金）〉（北海道大学）

北海道大学附属図書館報「楡蔭」（ゆいん）　109号　平成13年3月30日発行

〈編　集〉「楡蔭」編集委員会

〈発　行〉北海道大学附属図書館　〒060-0808　札幌市北区北8条西5丁目
TEL：011-706-2967　FAX：011-747-2855
ホームページ　http://www.lib.hokudai.ac.jp